

防長歷史曆 內容見本 索引

●印はすべて独立項目として解説がついています。

- 青木奕園
- 青木研談
 - 一を洋書翻譯掛となす
 - 西洋學所と一
 - 一攝痘法傳習
- 青木周藏
- 青木周彌
- 會津落城
- 秋穗八幡宮(縣社正八幡宮)
 - ア御井坊の多寶塔
- 安加郡麻社(護國神社)
- 赤根武人處刑
- 赤間神宮(官幣大社)
- 赤松連城
- 赤村及び佐々並戰爭
- 赤穂義士十人の長府藩預け
- 赤田神社(縣社)
- 阿川四郎

四七
 六九
 一六
 六三
 七二
 二二
 八九
 六〇
 二四
 七三
 四七
 六〇
 七六
 三八
 四一
 八九
 七〇
 六六

●秋芳潤
 ●明木權現原の兎變
 ●秋良教之助
 ●一人車船を發明す
 ●朝枝毅齋
 ●朝倉南慶
 ●麻田公輔(周布政之助
 ●淺見安之丞(○正慶△
 ●足利尊氏直義西走して
 ●一法樂和歌二首を
 ●足利直冬長門一宮をし
 しむ
 ●一法樂和歌二首を
 ●一氷上山興隆寺を
 足利直義
 ●一斯波高經と共に
 宮に獻ず
 ●足利義昭、毛利輝元樂
 を夾撃せしむ
 ●一吉川 慶

足利義隆の

[illegible]

防長歴史暦 内容見本 年代表

挙げられているすべての項目に独立した解説がついています。

どの頁からも聞こえてくる

先人の苦難、犠牲、栄光

そして励ましの声！

山口県が全国に誇る、歴史万華鏡

限定三百部復刻
(番号入)

防長歴史暦

山口県編

マツノ書店

正平五年（一二五〇）

享保十七年 (一七三二)

享保の大飢饉

七六四

防長歴史暦 内容見本

萩の亂と前原一誠

明治九年（一八七六）

文政三年（一八二〇）

農事改良者村本三五郎歿す

農事改良者村本三五郎歿す

村本三五郎は玖珂郡室木村むろのきの豪農であつて、長身多力、農事に最も熱心であつた。室木は今岩國市麻里布に屬してゐるが、もとの地方は大部分が開作地で、地味未だ稻作に適せず、農家は大抵窮乏に悩んでゐた。これが救済の志を抱いた三五郎は、その土質が棉花の栽培に適するを思ひ、極力試作に力めたが悉く失敗に終つた。よつて明和年間産棉の諸州を遍歴視察して試作したが、是れ亦成功しなかつた。寛政年間、領主吉川氏の委嘱あるに及び、大に決意する所あり、姿を乞食に窶し、狂痴の眞似をし、先づ隣國廣島に到り、農家に遊び自ら進んで農事を助け、飯を乞うて賃錢を受けず、爭つて一家に招き、且つ白痴と思ひ栽培法を秘藏しなかつた。かやうにして諸國の法を探つて歸郷し、三段歩の地を試作場とし、これを數區に劃し、同一種子の播種にも深淺厚薄を異にして試験した結果、備中玉島の法が最も土質に適ひ、遂に岩國棉の名聲關西に振ひ、特産岩國縮も亦これを基礎として盛況中心として漸次隣村に及ぼし、三三五郎は又九州に遊んで蓮根の栽培法を研究し、その他甘藷・瓜・茄子等の栽培を加ふるに至つた。三五郎は又九州に遊んで蓮根の栽培法を研究し、その他甘藷・瓜・茄子等の栽培法をも工夫し、農事改良に努め、農村振興に貢獻した。功により苗字を許され、天壽を全うして、文政三年正月四日、八十五歳を以て歿した。

防長人物誌

防長人物誌



便利な『山口県郷土辞典』

内田 伸

『防長歴史暦』は昭和十八年の刊行で、当時山口県史編纂委員であった小川五郎、御蘭生翁甫、広永達夫、石川卓美四氏の執筆になる。昭和十一年は明治維新七十年に当たったので、維新の大業に関係の深い山口県は、その記念として山口県史の編纂を企てた。翌十二年に県史編纂所が開設され、前記四氏がその編纂委員となった。この四氏は知る人ぞ知る、それぞれ透徹した史眼の持主であるので、今まで書かれている防長史を綴り合わせて県史としてまとめるということではなくて、この際さらに県下の資料を探索して、それらを充分に使用し、全く新しい山口県史をつくらうという構想であった。現在山口県文書館に多量に蔵されている県史編纂所史料がその時の収集の資料であるという。その史料の収集に多くの労力がさかれたためか、県史はすぐに本文執筆というわけにはいかなかったようである。

昭和十六年四月に、NHK防府放送局が放送を開始したが、その放送局から県史編纂所に、山口県の歴史上の出来ごとを毎日放送したいから、今まで防長に関係のある日々の歴史を調べて原稿にしてほしいという依頼があった。それによって各スタッフが、それぞれ手分けをして執筆されたのであるが、一年間の放送の後、それを増補訂正して一本にまとめたものが本書である。

内容は県史編纂のために作られていた年表の中から、重要なものを抽出し、月日に係けて暦日体に編成したものである。その事項は古代から昭和十五年までに至り、挙げられた項目は一

七〇〇余を数える。その一件一件の説明は、実的に確に明解にまとめられている。大内義弘の「応永の乱」、大内盛見の「宇佐宮の造営」、江戸時代の「撫育局創設」、「伊能忠敬の防長測量」、また幕末の「相州警衛」、「池田屋の変」さらに現代の「開作の築立」、「市制の施行」などなど、私どもはその事件は知っていても、原資料は何にあるか、誰にもわかるように短くまとめるにはどうすればよいかということによくぶつかる。その時私は座右のこの本を利用してゐる。実にこの本は「山口県郷土辞典」というべきものである。

本書に載っている人物は付録の索引項目で見ると五三一人ある。防長の人物辞典としては『近世防長人名辞典』（吉田祥朔著）『防長人物誌』（近藤清石著）などの立派なものがあるが、この『防長歴史暦』には両書に載っていない人物がさらに一八三人ある。その主なものに中世大内氏関係の高僧がある。その高僧は文化、政治に大きな影響を与えたのであるが、今まで彼らの手軽な伝記集はなかった。本書によってはじめて大内時代の高僧の行跡をよく知ることができる。

また他の人物辞典に載っている人物でも、たとえば「所郁太郎」の項を見ると、『近世防長人名辞典』は、いわゆる辞典風な書き方であるが、この『防長歴史暦』は物語風に書かれている。両書あわせ見る必要があるのである。

本書は今まで、暦日別に歴史事項を並べたものということで、山口県史研究者の中でもあまり注目されなかったようである。どうしたことか、昭和二十九年に発行された『防長史料文献解題』（第二集）にも本書は載っていない。^{*}しかしその内容を見ると、防長の重要な歴史上の出来ごとが網羅されており、その文章はたいへん的確で要を得ている。この本には付録冊子があったて、それには月別日別の項目の外に、年代表、項目索引がある。この項目索引によって『防長歴史暦』は辞典として充分に利用できるというわけである。座右に置かれて、手軽な山口県歴史辞典としての御利用をおすすめる次第である。

※この件については、次の理由が考えられます。

①『防長史料文献解題』（第二集）と『防長歴史暦』は全く同じ編者によって作られているため「自画自賛」を避けた。

②編者の四人は史料重点主義の人ばかりなので、それを利用した編集物には価値を置かず、その上「ラジオ放送の原稿」は通俗的と遠慮した。
マツノ書店



山口県の歴史小事典

——ドキュメンタリーとして読む「防長歴史暦」——

古川 薫

後漢書に「以^{ツテ}前人^ヲ為^ス鏡^ト戒^ト」とある。鏡は鑑とも書いた。鏡に模範・手本の意味を与え、史書を鏡とも呼んだ中国にならって、日本の中世には大鏡・今鏡・水鏡・増鏡の四大鏡に代表されるような編年体の歴史物語が生まれた。

反省材料としてのそれら歴史物語とは別に、源平・鎌倉初期の政局の実相を詳述した九条兼実の日記「玉葉」や鎌倉幕府の公的記録を日記体で編述した「吾妻鏡」などがある。やはり過去の歴史を鏡として、未来に資するという思いをかけた貴重な史料が遺産として伝えられた。歴史暦そのものである。現代では「振り返れば未来」という佳語も生まれた。歴史暦は、まさに未来への指針書といってもよい。

『防長歴史暦』は、戦争たけなわの昭和十八年に編纂された。当時の県知事が筆を執ったその序文は、やはり今のわれわれの耳になじまぬ文言が並べられているが、あの悲壮な緊張感のなかで、これを編纂する意欲の底に敷かれているのは、時代を超えた歴史の存在感である。そして肅々とつづられた先人たちの動きは、如何なる時代、情況をもつらぬく価値を持ちつづけるのだ。

『防長歴史暦』は、日記体をとって防長の歴史を編纂したもので、同一年月日に生起した事件・事象を集めている。大内・毛利の戦国から、幕末長州藩の事項まで、重層的に記述されるので、幅広い時間

枠のなかで、さまざまな人間の行動を俯瞰することもできる。

日記体で書かれた歴史を追うのは、通史を通読するのと同じがって、臨場感のようなものがただようといふこともある。

たとえば「六月」は日本書紀の昔から昭和二年まで八十七の項目で埋められているが、そのうち慶応二年「四境の役」関連の項目を拾うと以下のようなものである。

六月 七日 四境の役、大島口開戦。

六月十三日 長藩幕軍に応戦、書を遺る。

六月十四日 四境の役、芸州口小瀬川の開戦。

六月十六日 四境の役、石州口開戦。

六月十七日 四境の役、小倉口開戦。四境の役、益田攻略。

六月十八日 奇兵隊、小倉領田ノ浦占領。(以下略)

もちろん各項目には千字前後の解説があり、そのときの状況をドキュメンタリーとしてつかむことができる。

九百二十頁に約二千項目が収められている。大著『毛利元就卿伝』など三卿伝を監修した渡辺世祐博士を顧問に、旧制山口高校教授小川五郎氏をはじめ御薗生翁甫・広永達夫・石川卓美の各氏が編纂委員となった。郷土史の泰斗が精査した内容にも信頼でき、索引がついているので山口県の歴史小事典として利用できるのもありがたい。

『防長歴史暦』は、発刊当時、NHK防府放送局からラジオ放送されて評判になり、その後昭和五十年に歴史図書社によって復刻されたが、すでに古書店からも姿を消してしまっている。二十六年ぶりの復刻である。原本は戦時中のことで、製本も粗雑だが、マツノ書店の手で堅牢美麗な本としてよみがえるのが嬉しい。

■本書は昭和十一年に開始された「山口県史編纂事業」の初期段階で生まれた大著です。

■史料の収集から始まり、本書の編纂に手間取っているうちに太平洋戦争に突入したため、肝心の『山口県史』は一冊も刊行されませんでした。

■本書は枕頭の書として毎日読めるように作られています、入念な「索引」や「小年表」もついているため、

■体 裁 A5判 一〇三八頁

クロス装製・箱入

■定 価 一万四千元(消費税込)

■特 価 一万二千元(消費税込)

■特価締切 平成十三年七月末

限定三百部復刻(番号入)

▼本書と他の本を同時にお買い上げの際は、価格にかかわらず「送料サービス」になります。

防長歴史暦